

「現場を支える日本語教育研究—学ぶ・教える・評価する—」

第一分科会

教室指導は習得にどんな影響を与えるか

混合環境（自然習得環境＋教室習得環境）
の第二言語習得研究

小柳かおる（上智大学）

本発表の構成

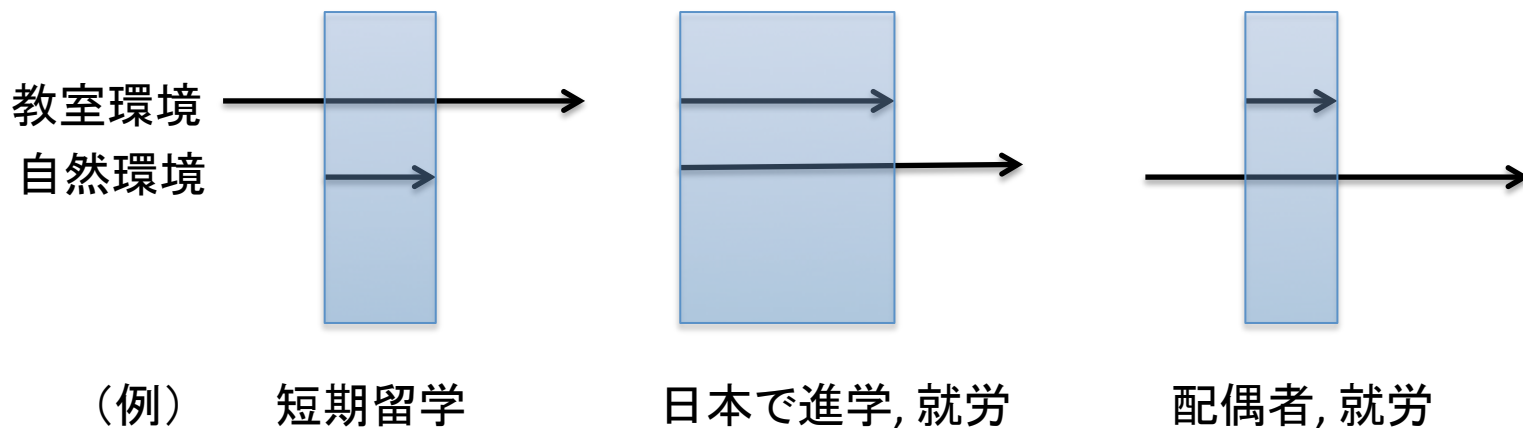
1. はじめに
2. 学習環境による習得過程の違い
 - 2.1 80年代の比較研究
 - 2.2 Study Abroadの記述的研究
 - 2.3 JFL学習者の短期留学の場合
 - 2.4 Study Abroadの実証研究
3. SLAの実証研究の成果と課題
 - 3.1 教室習得研究の動向
 - 3.2 国内の日本語の教室習得研究の現状
4. SLA研究と教育実践
 - 4.1 SLA研究から教育現場までの距離
 - 4.2 SLAの知見の活かし方

1. はじめに

日本国内で日本語を教える

→ 学習者の多くは混合環境

(教室習得環境 + 自然習得環境)



* 混合環境にあるのは習得過程の一時期のみ

→ 教室で学習者の習得をサポートするために、
教師は何をなし得るか？

2. 学習環境による習得過程の違い

2.1 80年代の比較研究

Felix(1981), Wode(1981), Pica(1983, 1984)等

e.g., 外国語学習者(教室)

vs. 第二言語学習者(混合)

vs. 大人の出稼ぎ労働者(自然)



問題点: 環境以外の要因が統制されていないので
厳密な比較になっていない



2.2 Study AbroadのSLA研究

同じ大学で一定期間の外国語履修の後

Study Abroad(混合) vs. At Home(教室のみ)

留学により、教室習得環境に加え自然習得環境 が加わった場合(=混合環境)

- ・語彙数の増加
- ・口頭能力の向上(OPIのレベルアップ)
- ・流暢さや発音の改善
- ・語用的な側面, 社会言語的能力の習得
- ・コミュニケーションストラテジーの使用の増加
- ・動機づけの統合的志向の高まり
- ・言語不安が下がる

→ 全般的に, コミュニケーション能力が向上

- * ただし、プログラム・デザイン, 居住形態, 文化規範的要因などにより, 個人差, 大
- * 文法や正確さはAt Home環境と大差なし
(Churchill & Dufon, 2006のレビュー参照)

2.3 JFL学習者の短期留学の場合

McMeekin (2006)

- ・ホストファミリーとの夕食時の会話で教室より多くの意味交渉, より多くの理解可能なインプット
(教室ではすぐ英語で説明が与えられる)
- ・教室では明確化要求され, 修正アウトプットへホストファミリーは学習者の不明瞭な発話を補って再形成する傾向

lino (2006)

- ホストファミリーとの会話は日米差に集中
- 常にアウトサイダーとしての扱い
- フォリナートークが多く, 真のNS-NSの会話を聞く機会がない
- 家庭で文法の誤りを直されることはあまりない
意味交渉は単語レベルにとどまる

Kanagy & Futaba (1994)

JFLではクラスの状況に不安

JSLではクラスの外のコミュニケーションに不安

2.4 Study Abroadの実証研究

DeKeyser (1991): 文法発達に留学の優位性なし

Collentine (2004)

2学期スペイン語を履修した後の一学期

Study Abroad (SA) vs. At Home (AH)

事前／事後テスト(オラルインタビュー)

- ・個別文法項目による形態素や統語の正確さ:
SA < AH
- ・ナラティブの能力: SA > AH
(動詞の過去形, 分詞, コミュニケーションや出来事に関する動詞や接続詞の使用)

Study Abroadの研究では、留学前のHome校で、また留学先でどのようなタイプの教室指導を受けたかについての言及なし



教室において習得を促進する指導を行い、効率のよい橋渡し

(本来の教室指導の強みは、言語形式に注意を向けさせることで、習得を加速化させ、より高い到達度に導けること)

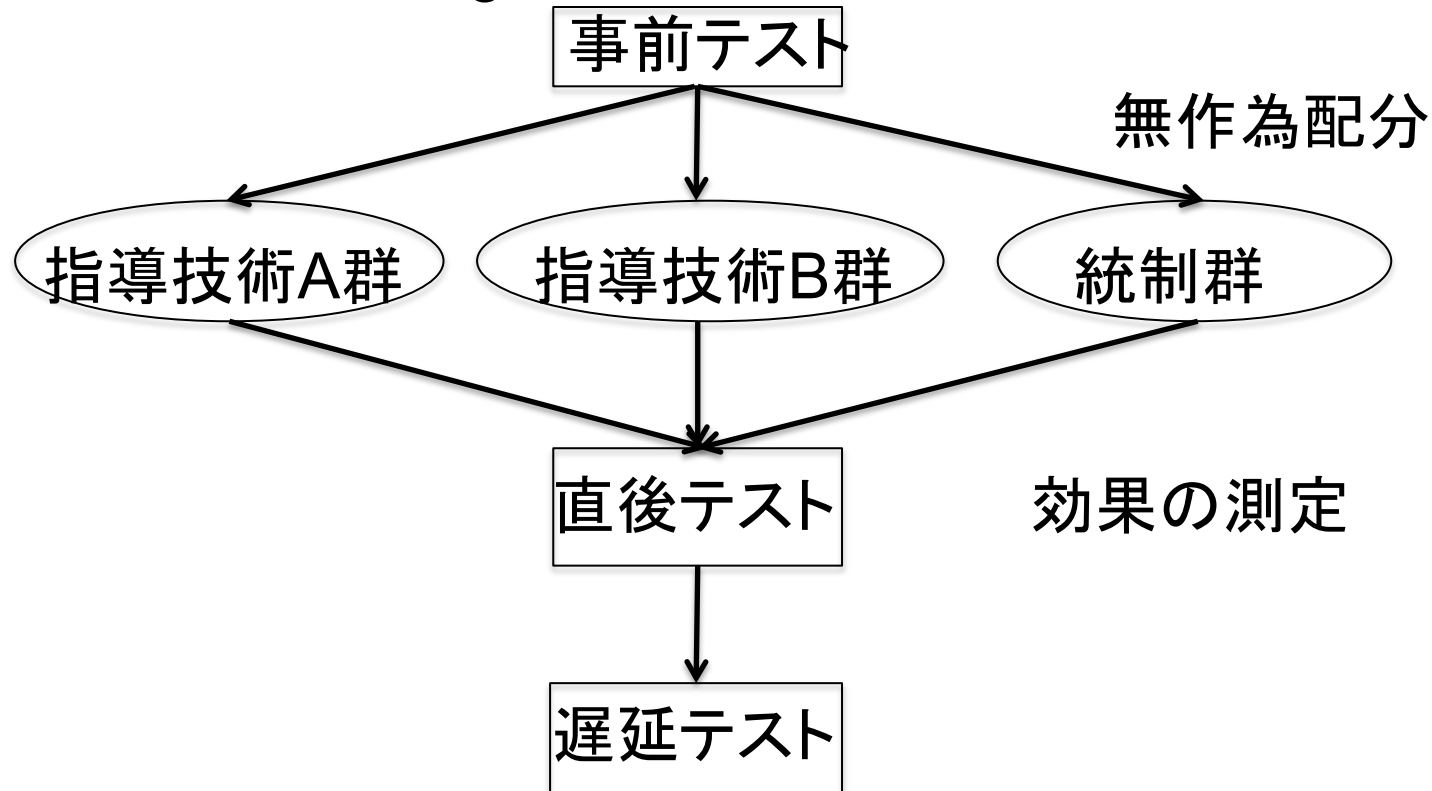
cf. 教室の外に出ればいくらでも日本語を使えるのだから、教室でやるべきは文法か？

(小柳, 2008a)

3. SLAの実証研究の成果と課題

3.1 教室習得研究の動向

- ・教室指導の効果を探る実験の典型的な手法
教育的介入 (pedagogical intervention)
＝認知的侵入 (cognitive intrusion)



- ・転移適切性処理の原理—記憶の理論
(Morris, Bransford, & Franks, 1977)



SLAにも適用

(Hulstijn, 2002; Robinson, 2003; Segalowitz, 2003)

明示的学習＝規則の提示、規則を適用する練習
→個別項目文法のペーパーテスト(明示的知識)
に有利

暗示的学習＝コンテキストの中で用例に多く出会う
→自発的な言語産出(暗示的知識)に有利

実験研究のメタ分析によると, 明示的モードの指導の効果, 大

(Koyanagi, in press; Norris & Ortega, 2000)



暗示的モードの習得へのインパクトを明示的モードに有利な個別項目文法のペーパーテストで測ったミスマッチの問題 (Doughty, 2003等)

現在の研究課題

- ・暗示的学習においてインプットは認知的にどのように処理されるか？
- ・帰納的, 暗示的モードの学習は習得をどのように促進するか？

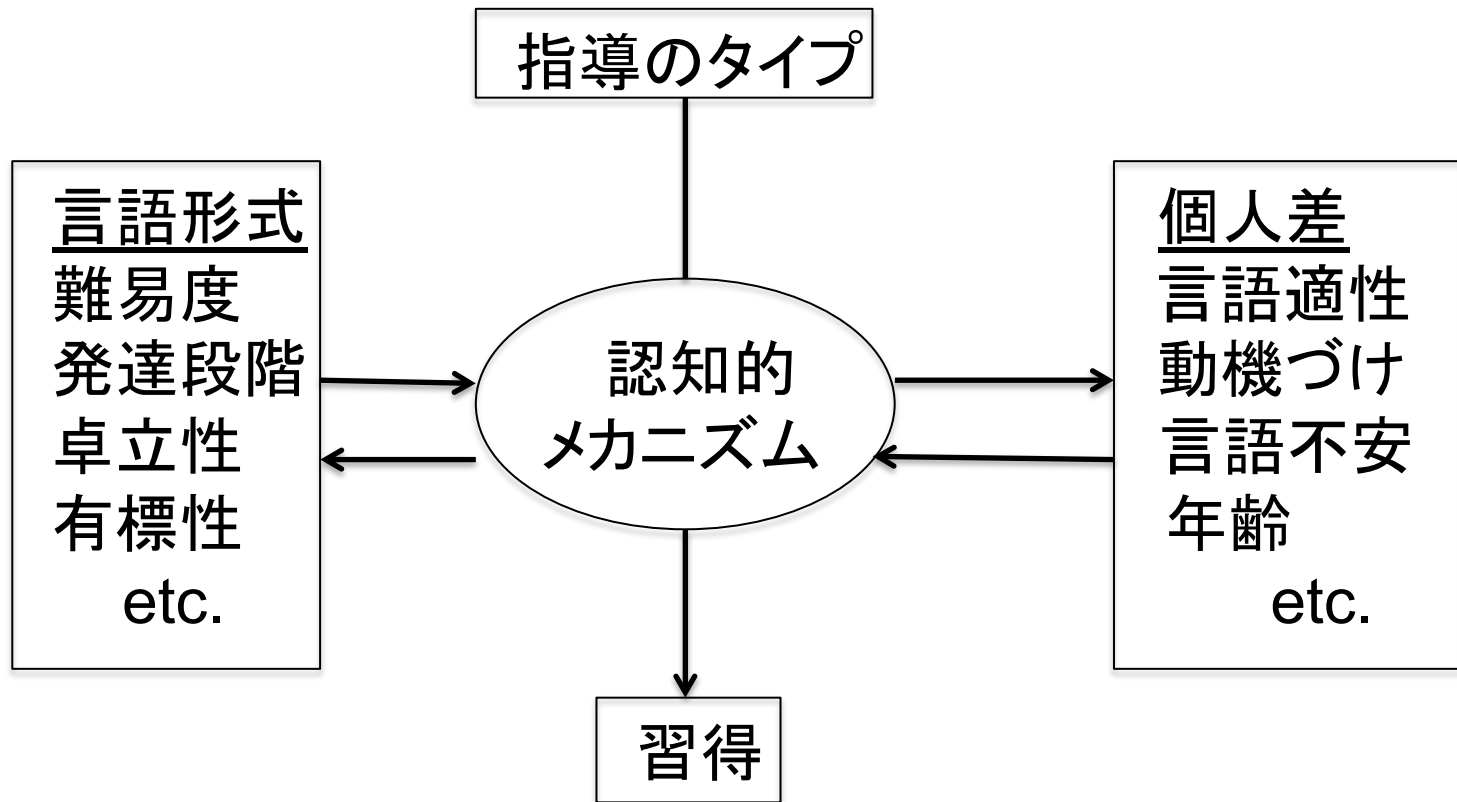
3.2 国内の日本語の教室習得研究の現状

- ・実証研究がほとんどなされていない
- ・どんな指導が習得に効果的か, 認知的なメカニズムに照らした考察がなされていない
(Koyanagi, in press参照)

- ・例外

- 向山(2004)

- 日本語学校の意味重視の指導に文法説明をプラス, 連体修飾節の習得が促進
 - 特に事前テストのスコアが低い学習者ほど文法説明を与えたインパクトあり



<教室指導の効果と諸要因との相互作用(小柳, 印刷中)>

* 習得は複雑な認知プロセス→解明すべき課題は多い

4. SLA研究と教育実践

4.1 SLA研究から教育現場までの距離

両者のアプローチは正反対

SLA: 介在する変数をできるだけ排除,

独立変数(例 指導のタイプ) → 従属変数

教育: 教師が良いと思うことは何でも取り入れる

議論の土俵が異なることを考慮する必要あり

一つのSLA研究のみでは教授法を提言できない

(小柳, 2004, 2015)

4.2 SLAの知見の活かし方

1) 知識としてのSLA

日本語教育の多様化

教師は教師養成で習わなかった事態, 経験のない事態に直面する可能性, 大



- 教師の意思決定の根拠となる一つのリソース
カリキュラム策定, 教室活動の考案
授業運営, 教材作成
- 教師の誤ったビリーフを正す一つの知識源
例: メタ言語的知識は重要か?

2) SLAから提案された教授法の実践

心理言語面から見て妥当性のある教授法
(psychologically relevant pedagogy)

→タスク中心の教授法 (Long, 1985, 2015等)
(Task-Based Language Teaching: TBLT)

- ・実生活に照らした目標タスクの設定
- ・帰納的なチャンク学習の推進 (分析的アプローチ)
- ・意味あるコンテクストの中で学習者の注意を言語形式にも向けさせる (focus on form)
- ・グループワークによるインターアクションの重視
- ・個人差への配慮

(小柳, 2008, 2013を参照)

・タスクとは？

実生活で行う具体的なタスク (Long, 1985)

例『できる日本語』の行動目標

-旅行中に起こった困った状況や今の状況を他の人に伝えたり, 観光スポットで目にした風景や建物について簡単に説明することができる

文型積み上げ式の従来の教科書は統合的アプローチなので, SLA提唱のTBLTにはならない

cf. 統合的アプローチ vs. 分析的アプローチ

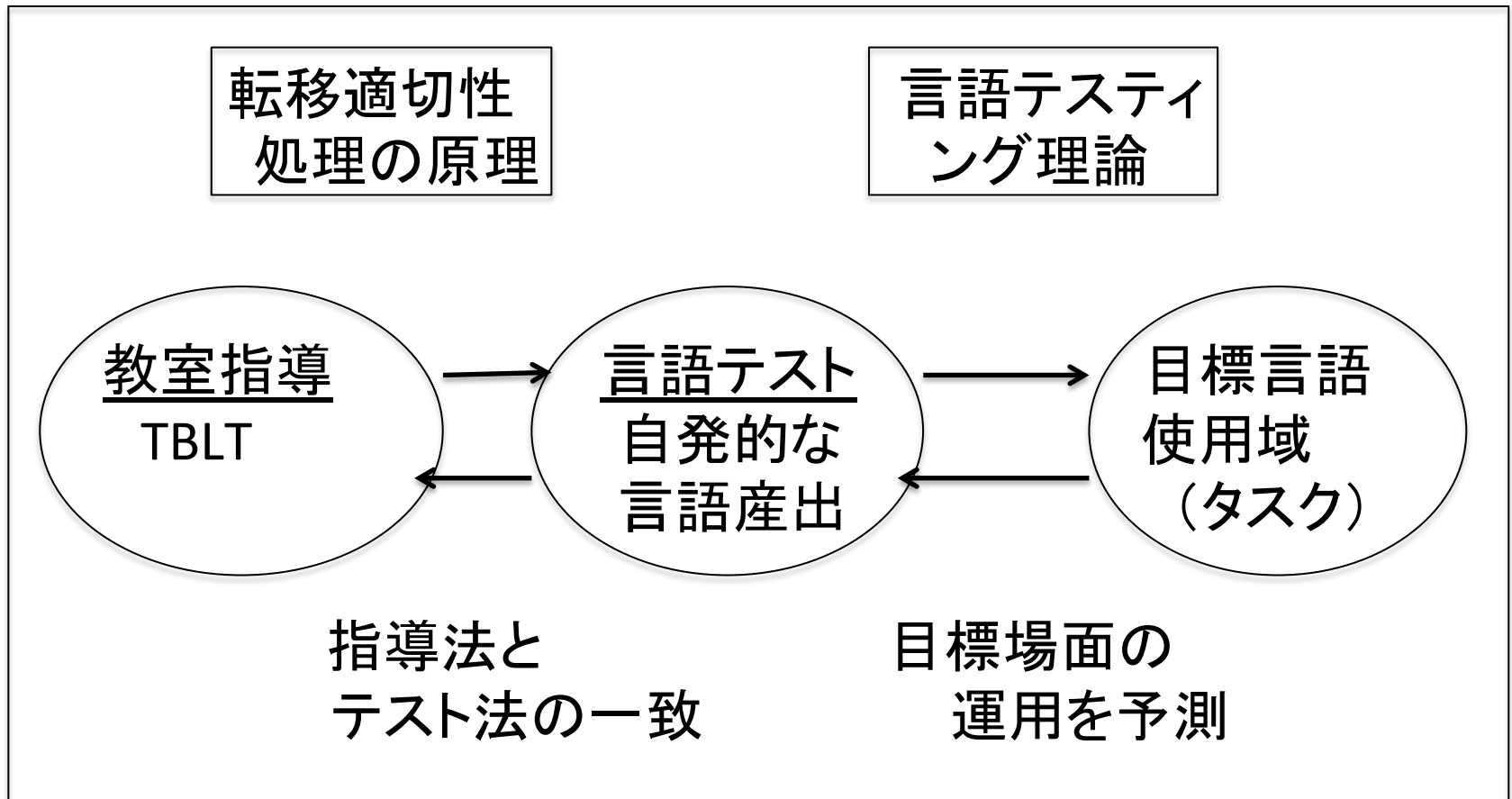
- ・言語テストの役割

目標言語使用域でどんなパフォーマンスをするかを予測するもの (Bachman, 1990)



文法のペーパーテストでは, 実生活のパフォーマンスを予測できない → パフォーマンスの評価が必要
(四技能)

パフォーマンスベースの評価をすれば, テストの良い波及効果が生まれる



<教室指導と言語テストの関係> (小柳, 2008, 2016)

* 教室で学んだことが実生活のタスクに転移する

参考文献

- 小柳かおる(2004)『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク
- 小柳かおる(2008a)「文法の習得(第3節)」(第3章 混合環境(自然習得+教室習得)における日本語習得)坂本正・小柳かおる・畑佐由紀子・村上京子・森山新編『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』(pp.168-188)スリーエーネットワーク
- 小柳かおる(2008b)「第二言語習得研究から見た日本語教授法・教材—研究の知見を教育現場に生かす—」『第二言語としての日本語の習得研究』11, 23-41.
- 小柳かおる(2013)「タスクによる言語学習が第二言語習得にもたらすインパクト—インターアクション及び認知的な観点から見たタスク」『第二言語としての日本語の習得研究』16, 16-37.
- 小柳かおる(2015)「第二言語習得研究の調査・研究方法ガイド」『日本語学臨時増刊号(特集 入門:第二言語習得研究)』34-14, 182-192.
- 小柳かおる(2016)『日本語に関する教室習得研究(第5章)』小柳かおる・峯布由紀共著『認知的アプローチから見た第二言語習得—日本語の文法発達段階と教室指導の効果』(pp.223-255) くろしお出版
- 小柳かおる(印刷中)「第二言語習得概論—言語学習における普遍性と個別性—」徐敏民・近藤安月子編『日本語教育の研究(日本学研究叢書第9巻)』(pp. 348-369.外語教学与研究出版社

向山陽子(2004)「意味重視の指導に文法説明を組み込むことの効果—連体修飾節を対象として」『第二言語としての日本語の習得研究』7, 100-120.

Churchill, E., & Dufon, M. A. (2006). Evolving threads in study abroad research. In M. S. Dufon & E. Churchill (Eds.), *Language learners in study abroad contexts* (pp.1-30). Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Collentine, J. (2004). The effects of learning contexts on morphosyntactic and lexical development. *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 227-248.

DeKeyser, R. (1991). Foreign language development during a semester abroad. In B. F. Freed (Ed.), *Foreign language acquisition research and the classroom* (pp. 104-119). Lexington, MA: D. C. Heath.

Doughty, C. (2003) Instructed SLA: Constraints, compensation, and enhancement. In C. J. Doughty & M. H. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition* (pp. 256-310). Malden, MA: Blackwell.

Felix, S. (1981). The effect of formal instruction on second language acquisition. *Language Learning*, 31, 87-112.

Hulstijn, J. H. (2002). Toward a unified account of the representation, processing and acquisition of second language knowledge. *Second Language Research*, 18, 193-223.

- ino, M. (2006). Norms of interaction in a Japanese host family setting: toward a two-way flow of linguistic and cultural resources. In M. S. Dufon & E. Churchill (Eds.), *Language learners in study abroad contexts* (pp.151-176). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Kanagy, R., & Futaba, T. (1994). Affective variables in learners of Japanese in different settings. *Journal of Asian Pacific Communication*, 5, 131-145.
- Koyanagi, K. (in press). The role of instruction in acquiring Japanese as a second language. In M. Minami (Ed.), *Handbook of Japanese applied linguistics* (pp. 199-222). Berlin/Boston: Gruyter Mouton.
- Long, M. H. (1985). A role for instruction in second language acquisition: Task-based language teaching. In K. Hyltenstam & M. Pienemann (Eds.), *Modeling and assessing second language acquisition* (pp. 77-99). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Long, M. H. (2015). *Second language acquisition and task-based language teaching*. Malden, MA: Wiley Blackwell.
- Long, M.H., & Robinson, P. (1998). Focus on form: Theory, research, and practice. In C. Doughty & J. Williams (Eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition*. (pp.15-41). New York: Cambridge University Press.

- Morris, C. D., Bransford, J. D., & Franks, J. J. (1977). Levels of processing versus transfer appropriate processing. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 16, 519-533.
- Norris, J. M., & Ortega, L. (2000). Effectiveness of L2 instruction: A research synthesis and quantitative meta-analytic review. *Language Learning*, 50, 417-528.
- Pica, T. (1983). Adult acquisition of English as second language under different conditions of exposure. *Language Learning*, 33, 465-497.
- Pica, T. (1984). Methods of morpheme quantification: Their effect on the interpretation of second language data. *Studies in Second Language Acquisition*, 6, 69-78.
- Robinson, P. (2003). Attention and memory during SLA. In C. J. Doughty & M. H. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition* (pp. 631-678). Malden, MA: Blackwell.
- Segalowitz, N. S. (2003). Automaticity and second languages. In C. J. Doughty & M. H. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition* (pp. 382-408). Malden, MA: Blackwell.